

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：28001

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520178

研究課題名(和文)『管絃音義』の研究

研究課題名(英文)A Study of the <<Kangen-ongi>>

研究代表者

高瀬 澄子 (TAKASE, Sumiko)

沖縄県立芸術大学・音楽学部・准教授

研究者番号：60304565

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円、(間接経費) 180,000円

研究成果の概要(和文)：『管絃音義』とは、文治元年(1185)、北山隠倫涼金撰とされる楽書である。本研究は、伝本の調査に基づき、『管絃音義』に含まれる四つの図に関する理論と思想を明らかにした。結果は次の通りである。(1)『管絃音義』の四つの図は、調体系を表した中国の旋宮図と似ているが、似て非なるものである。(2)「返音輪転図」とその解説は、『声明口伝』(大悲房寂忍、12-13世紀)における反音の記述とほぼ共通しており、その背景には四天王寺の舞楽法会と何らかの関係があった可能性も浮かがるが、今後の検証が必要である。

研究成果の概要(英文)：The <<Kangen-ongi>> is a musical treatise written by Hokuzan-inrin-ryokin in Bunji 1 (1185). This study examines the music theory and ideas represented in four figures from the <<Kangen-ongi>>, based on an investigation into its historical sources. It finds that: (1) the four figures in the <<Kangen-ongi>> are similar to the Chinese Xuangongtu representing the system of modes, but are different in substance; and (2) one figure, "Hennon-rinten-zu,"* and its explanation are almost identical to descriptions of Hennon in <<Shomyo-kuden>> (by Daihibo Jakunin from the twelfth to thirteenth century). In this, we can see a possible relation to the Bugaku-hoe (Buddhist ritual accompanied by music and dance) at Shitenn oji, which will need to be verified.

*The exact pronunciations for the Chinese characters in "Hennon" and other names are uncertain.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：音楽学 日本音楽史 雅楽 声明

1. 研究開始当初の背景

(1) 天平七年(735)、吉備真備により、『楽書要録』が日本へ伝えられた。『楽書要録』とは、7世紀末頃、則天武後の命によって編纂された音楽理論書である。現在知られている限り、中国から日本へ渡来した最初の音楽の専門書であり、後世の日本の楽書にしばしば引用され、日本音楽史に大きな影響を与えたと評価されている。しかし、『楽書要録』が後世にどのように受容され、どのような影響を与えたかについては、じつは十分に明らかになっていない。研究代表者は、「『楽書要録』の研究」(2007)において『楽書要録』の理論と思想の内容を明らかにしたが、受容の問題については十分に明らかにすることができなかった。『楽書要録』の受容の状況を明らかにすることは、唐代の音楽理論を日本がどのように受け入れたかを明らかにすることであり、残された重要な課題である。

(2) 『楽書要録』の受容の状況を明らかにするには、後世の楽書における引用状況を調査すること、後世の日本で成立した同様の楽書と比較すること、という二つの方法が考えられる。本研究は、後者の方法を採用した。なぜなら、前者は外的な知識の利用であるのに対し、後者は内的な理論の理解であり、ある意味で『楽書要録』の日本音楽史への「影響」をより端的に示すと考えられるからである。『管絃音義』について、先行研究では「『楽書要録』を直接受け継いだ書」(『日本音楽大事典』1989: 412)との指摘がある。奈良時代に渡来した『楽書要録』と平安時代末に成立した『管絃音義』は、日本古代の初期と末期に位置し、内容的にも時代的にも、唐代の音楽理論の受容と変容の過程を検証するにふさわしい。本研究において『管絃音義』に着目したのは、『楽書要録』によって伝えられた唐代の音楽理論がどのように受け入れられ、どのように変容したかを明らかにするためである。

2. 研究の目的

『管絃音義』(北山隱倫涼金撰、1185)は、調子に対する思想的な解釈を体系的に論述した、音楽理論書の一種である。塙保己一編『群書類従』管絃部の冒頭に掲載され、仏典や漢籍を引用しながら、陰陽・五行・四季・五方・五臓等、音以外の諸要素と音とを結びつけた形而上的な理論と思想を展開した内容で知られている。音楽学だけでなく、文学や音韻学の方野からも注目される重要な文献であるが、その内容は難解であり、十分に理解されてきたとは言いがたい。内容の正しい理解に必要な、伝本の詳細な調査も不十分である。本研究は、伝本の調査を通して、『管絃音義』の理論と思想の内容を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 従来の『管絃音義』に関する研究は、主に活字翻刻本(『群書類従』管絃部所収)と影印本(『古楽書遺珠』所収、天理図書館所蔵本)に基づいていた。しかし、日本古典籍総合目録データベースによれば、『管絃音義』には15点の伝本がある。そのうち、活字翻刻本と影印本の底本を除くと、所蔵者は次の通りである。

内閣文庫、宮内庁書陵部(2点)、京都大学(2点)、東京芸術大学音楽学部、東北大学狩野文庫、影考館文庫、神宮文庫、龍谷大学、小浜市立図書館、多家、羽塚啓明。

これらの伝本の大部分は、従来の研究ではほとんど参照されていない。そこで、本研究では、できる限りすべての伝本を収集し、各本の系統関係を明らかにする。

(2) (1)において収集した各本、活字翻刻本、影印本の本文を校合し、現代語訳の作成を試みる。本文の校合と現代語訳の作成により、内容の全貌が明らかになると予想される。

(3) (2)の結果に基づき、理論と思想の構造を分析し、背景を考察する。

構造の分析は、文章の構成、理論と思想との関係、という二つの視点で行う。文章の構成は、特に図に注目し、中国伝統音楽の理論において「旋宮図」として知られる図との関係を明らかにする。理論と思想との関係は、音と音以外の諸要素とが、どのような思想を背景に、どのような位相で関わりあっているのかを分析する。なお、図に注目するのは、現在知られている限り最古の旋宮図は、『楽書要録』に描かれたものであるからである。

背景の考察は、仏教との関連、目的意識の所在、という二つの視点で行う。仏教との関連は、唐代は仏教の盛んな時代であったにもかかわらず、『楽書要録』の少なくとも現存する3巻には、仏教の影響は全くなかったからである。目的意識の所在は、中国における音と音以外の諸要素の結びつきとの背景には、明らかに政治的な目的意識があったからである。

4. 研究成果

(1) 伝本は、内閣文庫、宮内庁書陵部(2点)、京都大学(2点)、東京芸術大学音楽学部、東北大学狩野文庫、影考館文庫、龍谷大学が所蔵する9点について、複写資料を収集または参照した。そのうち、宮内庁書陵部(2点)、京都大学(2点)、東京芸術大学音楽学部、龍谷大学が所蔵する6点については実見した。

従来の研究によれば、『管絃音義』の伝本には、文永3年(1266)書写本、正安2年(1300)書写本、乾元2年(1303)書写本をそれぞれ祖本とする三つの系統がある(『日本古典音楽文献解題』1987: 91)。奥書によれば、収

集した伝本のうち、影考館文庫所蔵本は文永3年(1266)書写本、宮内庁書陵部所蔵本(2点)は正安2年(1300)書写本、京都大学所蔵本2点のうち1点と東京芸術大学所蔵本は乾元2年(1303)書写本の系統であった。京都大学所蔵本のうち残る1点、内閣文庫所蔵本、東北大学所蔵本、龍谷大学所蔵本は、文永・正安・乾元のどの奥書もなく、系統不明であった。しかし、内閣文庫所蔵本、東北大学所蔵本、龍谷大学所蔵本の3点については、東京芸術大学所蔵本と1丁の行数や1行の字数がほぼ同じであるため、近接した系統の写本とみられる。

神宮文庫、小浜市立図書館、多家、羽塚啓明が所蔵する伝本については、調査することができなかった。ただし、羽塚啓明(1880-1945)の所蔵資料は第二次世界大戦により焼失しているため、羽塚啓明所蔵本はもはや現存しない可能性が高い。

(2) 本文の校合と現代語訳の作成は、「返音」に関する部分について行った。

『管絃音義』における「返音」という用語は、『歌舞品目』や『古事類苑』の「反音」の項に引用されている。反音とは、雅楽や声明においては、転調や移調の一種を意味する用語と説明され、「変音」「返音」とも表記される。一方、旋宮図における「旋宮」とは、中国伝統音楽の理論で転調や移調を意味する用語である。そこで、「返音」に関する部分に焦点を絞ることとした。

『管絃音義』の「返音」に関する部分は、「返音輪転図」と題する図の部分と、「返音略頌」から始まる文章の部分に分けられる。宮内庁書陵部の所蔵する正安2年(1300)書写本には、「返音輪転図」に続いて、龍笛の図が描かれている。この龍笛の図は、本研究で調査した伝本の中では、正安2年(1300)書写本のみが存在し、他の系統の伝本には存在しないことが明らかとなった。正安2年(1300)書写本は従来の研究でも参照されているが、この図の異同については言及されていない。なお、宮内庁書陵部は正安2年(1300)書写本を2点所蔵しているが、「返音」に関する部分を見る限り、一方が一方を転写したものと判断することができる。

「返音」に関する部分以外については、本文の校合と現代語訳の作成を行うことができなかった。

(3) 構造の分析と背景の考察は、図に関する部分について行った。

『管絃音義』には、「高下輪転図」「返音輪転図」「五行相生図并相剋図」「相生輪転図」と称する四つの図が含まれる。これらの図は、一見したところ、中国の旋宮図に似ている。旋宮図とは、二重の円に十二律と七声を記し、円を回転させることによって八十四調の体系を表した図を指す。しかし、『管絃音義』の四つの図を旋宮図と比較すると、その理論

的な構造はかなり異なり、似て非なるものであることが明らかとなった。主な相違点は、円を回転させることを意図していないこと、龍笛の譜字が用いられていること、三分損益法と無関係であること、等である。これらの図の背景にあるのは仏教の思想と五行思想であり、両者を折衷させて、音と音以外の諸要素との結びつきを論じているとみられる。

「返音輪転図」と「返音略頌」によれば、『管絃音義』における「返音」とは、平調、上無調、黄鐘調、下無調、壹越調、盤涉調、双調の順に循環するものである。調子の移り変わりの順は、雅楽の口伝書『残夜抄』(藤原孝道、13世紀)の「かへりこゑ」、天台声明の理論書『声明用心集』(湛智、1233)の「羽調変音」と一致する。この二つの文献は単に調子の移り変わりの順が同じというだけであるが、真言宗の声明家、大悲房寂忍(12-13世紀)の所説を記した『声明口伝』における反音の記述は、『管絃音義』の「返音輪転図」「返音略頌」とほぼ共通している。

『管絃音義』の伝本のうち、文永3年(1266)書写本と正安2年(1300)書写本の系統は四天王寺との接点があり、一方、『声明口伝』の大悲房寂忍は、もと四天王寺の出身であった。『管絃音義』と『声明口伝』における反音の共通性の背景には、四天王寺の舞楽法会と何らかの関係があった可能性もうかがえる。しかし、その可能性を検証するには、今後、四天王寺に関わる雅楽や声明の諸文献を調査する必要がある。なお、『管絃音義』における「返音」が、実際に転調や移調に関わる理論をどれほど反映しているかについても、今後の検証が必要であろう。

図に関する部分以外については、構造の分析と背景の考察を行うことができなかった。

(4) 当初の研究計画のすべてを実施することはできなかったが、当初は想定していなかった声明関係の文献により、先行研究によって指摘されていた『管絃音義』と声明との関係を具体的に裏付けることができたことが、本研究成果の意義であると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

高瀬澄子、『管絃音義』における「返音」、ムーサ 沖縄県立芸術大学音楽学研究誌、査読無、第15号、2014年、45-64頁。

高瀬澄子、『管絃音義』に見られる図について、ムーサ 沖縄県立芸術大学音楽学研究誌、査読無、第13号、2012年、41-51頁。

[学会発表](計3件)

高瀬澄子、『管絃音義』における「返音」、東洋音楽学会第64回大会、2013年11月

10日、静岡文化芸術大学。
高瀬澄子、『管絃音義』の「七音義釈」について、第10回日中音楽比較研究国際学術会議、2013年3月27日、東京芸術大学。
高瀬澄子、『管絃音義』に見られる図について、第九屆中日音楽比較国際学術検討会、2011年10月14日、済南：山東師範大学音楽学院。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高瀬 澄子 (TAKASE, Sumiko)
沖縄県立芸術大学・音楽学部・准教授
研究者番号：60304565

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：